

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 31 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010 ～ 2012

課題番号：22520034

研究課題名（和文）メルロ＝ポンティ存在論における文学の意義づけ

研究課題名（英文）The Significance of Literature in Merleau-Ponty's Ontology

研究代表者

加國 尚志（KAKUNI TAKASHI）

立命館大学・文学部・教授

研究者番号：90351311

研究成果の概要（和文）：

本研究期間中に 8 本の論文発表と 3 つの学会発表を行なった。

メルロ＝ポンティの存在論における文学の位置づけについて、基礎的な文献の読解に基づき、論文を執筆した。その成果として、2012 年 2 月に「メルロ＝ポンティ哲学における文学と両義性」を『立命館文学』に発表した。また、フランス、パリ、エコール・ノルマル・シュペリールで 2012 年 5 月 5 日に行なわれた国際コロックでフランス語による発表“La chair du monde- une petite consideration sur la relation entre deux écrivains, Merleau-Ponty et Claude Simon”を発表した。これらの論文と国際学会発表は、本研究の当初よりの計画と成果公表の方針に沿うものであり、十分な成果を収めることができた。

研究成果の概要（英文）：From 2010 to 2012, I wrote 8 papers and made 3 presentations about the significance of literature in Merleau-Ponty's ontology based on my reading of his basic texts. As a result of this research project, I published “The Literature and the Ambiguity in Merleau-Ponty's Philosophy” on “Ritsumeikan Bungaku” in 2012. I also made a presentation “The Flesh of the World—a Small Consideration on the Relation between Two Writers, Merleau-Ponty and Claude Simon” in French at an international meeting in Paris, 2012. These works are proper to the plan of this research project and to its aim.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	200,000	60,000	260,000
2011 年度	200,000	60,000	260,000
2012 年度	200,000	60,000	260,000
年度			
年度			
総計	600,000	180,000	780,000

研究分野：哲学・倫理学

科研費の分科・細目：哲学、哲学・倫理学

キーワード：メルロ＝ポンティ 哲学 存在論 文学 芸術

1. 研究開始当初の背景

本研究開始の時期、メルロ＝ポンティの後期哲学における文学作品の持つ意味について明らかにすることは、メルロ＝ポンティ

の哲学及びフランス現代哲学の研究において重要な意味を持っていた。後期メルロ＝ポンティ哲学の難解な表現を理解するうえで、彼の参照していた文学作品を理解すること

がどうしても必要であり、最近のフランスの研究者の関心がある方面に向かっていたからである。また、哲学と文学の越境的な研究が開拓されることが必要であった。本研究は、従来の哲学研究の制限を超えて、哲学と文学の相互関係についての研究をもとに、哲学の言語のあり方そのものを反省的かつ批判的に問い、そこから存在論の言語の可能性を開くことであった。

本研究は、当時の国際的な研究状況と研究の領域横断的な方向性とを背景として開始された。

2. 研究の目的

後期メルロ＝ポンティ哲学における文学作品への参照を明らかにし、そのことによりメルロ＝ポンティ存在論の理解を確実なものとする、及び、その研究を通じて、哲学と文学の領域横断的な研究領域と方法を開拓することを目的とする。

具体的には、哲学における存在論的言語の可能性を文学の表現のうちに見ることが可能かどうかを検討し、そのことを通じて、哲学における存在論的言語の表現の可能性を追求し、哲学の理論的拡張と領域横断的な言語活動の可能性を明らかにすることを目指す。

3. 研究の方法

後期メルロ＝ポンティの著作及び、二次的な研究文献の読解、またメルロ＝ポンティが参照した文学作品及びその二次的な研究文献の読解を通じて、後期メルロ＝ポンティ哲学における哲学と文学の関係を明らかにする。

とりわけ後期メルロ＝ポンティの講義録や研究ノートにおける文学作品への言及を追いながら、その比較考察を通じて、メルロ＝ポンティ存在論における言語のあり方についての思想を解明することを目指す。

具体的には、『見えるものと見えないもの』及び『講義ノート 1959-1961』における文学言及をもとに、メルロ＝ポンティにおけるブルースト、クロード、クロード・シモンの受容とそれが与えた存在論的記述への影響を検討する。

4. 研究成果

研究期間内にメルロ＝ポンティの存在論における文学の位置づけについて、基礎的な文献の読解に基づき、8本の論文と3つの学会発表を公表した。

これらの研究成果には、フランス語での論文発表とそのドイツ語版の出版も含まれ、国際的な研究成果の発信を行なった。

2010年度：2010年度は、科学研究費補助

金交付以前の研究の継続を行ない、そのいくつかの成果を学会等で発表した。

2010年9月に、早稲田大学におけるハイデガー・フォーラム第5回大会で「私はこの世ではとらえられない-クレーをめぐるメルロ＝ポンティとハイデガー」を口頭発表した。この発表は、メルロ＝ポンティにおける芸術作品の概念をハイデガーのそれと比較し、そこに見られる「見えないもの」の意義を存在論的に明らかにしたものである。この発表では文学との関わりは取り上げられなかったが、後期メルロ＝ポンティにおける芸術概念の輪郭を明らかにすることができ、今後の研究の準備作業として十分な内容となった。

また、メルロ＝ポンティ研究の国際的雑誌 *Chiasmi Internationale* 12 に論文 *Le corps aux limites de la representation. Theorie du corps et de la peinture chez Merleau-Ponty* を発表した(フランス語)。本論文は、メルロ＝ポンティにおける身体と絵画表現を問題にしたものであるが、同時に、詩人の身体と言語についての考察を含むものであり、当該研究の成果となるものである。この研究をフランス語で国際的に発信できたことの意義は非常に大きい。本論文のドイツ語版 *Der Leib als Bedingung der Möglichkeit von Vorstellung* を *Orbis Phaenomenologicus* に掲載することができた。本研究はフランス語、ドイツ語において国際的な成果として公表されたのである。

また交付以前の研究成果を公刊したものであるが、メルロ＝ポンティ哲学における身体論と言語表現の関係を日本の詩歌表現とクロード・シモンの比較という形で論じた「私は今ここであそこにいる-メルロ＝ポンティの身体論と空間論」を『臨床哲学の諸相 空間と時間の病理』(木村敏・野家啓一監修 河合教育文化研究所)に掲載した。本論文は、後期メルロ＝ポンティ存在論における文学考察を哲学上の空間論と結びつけたものとして、本研究の主要な論点を描出したものである。このように本研究期間中に外国語での国際的な発信、及び共編著への収録として国内で成果を発信できたことは、本研究の内容を社会的な評価へと結びつけるうえで重要な成果となった。

2011年度：2011年度は、シンポジウムの発表依頼(日本シェリング協会)と論文執筆依頼(岩波書店『思想』)を受け、それらの依頼の内容と自身の研究内容とを関連させつつ、研究発表を行なった。日本シェリング協会第20回大会(2011年7月)でのシンポ

ジウム「自然の光と闇」での提題「神々の骰子—シェリングにおける自然の根源偶然」は、基本的にはシェリング哲学への言及をもととしたものであるが、メルロ＝ポンティのシェリング解釈にも言及し、とりわけその内容において、メルロ＝ポンティ、シェリング、田辺元における自然の偶然性とそれを表現する言語の可能性の問題を論じたものである点で、本研究計画の内容を踏まえてのものであり、本研究計画との関連性を持つと同時に、今後のその哲学史的拡張の方向を与えるものであった。

また岩波書店『思想』の「田辺元の思想—没後 50 年を迎えて」への執筆依頼に応じる形で、「沈黙と偶然—田辺元『マラルメ覚書』をめぐって」を執筆した。本論文は、直接的にメルロ＝ポンティの哲学に言及するものではないが、田辺元がマラルメの詩『双賽—擲』について加えた解釈において、モーリス・ブランショへの批判を行なっている点について、その哲学的な内容に関して考究したものである。この論文での主題は、文学の言語とその存在論的な位置づけについて、田辺元がブランショを批判しながら、同一性のさらに根源へと肉薄する言語の可能性を明らかにしようとしたことを示すものであり、本研究でのメルロ＝ポンティにおける文学の言語と存在論との関わりの研究を、田辺元という日本の思想家について転用するという意味を持つものであった。そのかぎり、本研究計画の内容に沿うものであると同時に、その研究内容と方向をフランス哲学のみならず日本思想にまで拡張する可能性を明らかにした点で、本研究計画において重要な意味を持つ研究成果であった。

本研究計画によって行なわれた研究の成果として、2012 年 2 月に「メルロ＝ポンティ哲学における文学と両義性」を『立命館文学』に発表した。本論文は、メルロ＝ポンティにおける文学の位置づけをめぐって、初期の段階からボーヴォワール『招かれた女』の解釈が、両義性概念とともに、とりわけ他者論の領域において重要な役割を担っていたことを指摘したものである。メルロ＝ポンティとボーヴォワールの影響関係については、すでにエマニュエル・ド・サントベールの研究などがあるが、本論文はより詳細に『招かれた女』のメルロ＝ポンティによる読解を負うことで、両義的な人間存在と道徳の関係について考察を行なった点で、従来の研究にない視点を与えることができた。

2012 年度：

研究期間最終年度は、フランス、パリ、エコール・ノルマル・シュペリウールで 2012 年 5 月 5 日に行なわれた国際コロックでフランス語による発表“La chair du monde- une petite consideration sur la relation entre deux écrivains, Merleau-Ponty et Claude Simon”を発表した。

本発表は、メルロ＝ポンティの「世界の肉」という概念がクロード・シモンに由来しており、両者の比較を通じて、メルロ＝ポンティの存在論に、どのように文学の影響が入り込んでいるかを考察したものである。

本発表はフランス語で行なわれ、リチャード・カーニー、ナタリー・ドゥプラズ、ギ・フェリックス・デュポルタイユ各氏からの質問と討議を受け、その内容を研究者の間で討議することができた。

この発表は本研究計画の成果を国際的に発信するものであり、海外の先端的な研究者の集う国際的なコロックで発表できたことの意義は大きいと言える。

これらの論文と国際学会発表は、本研究の当初よりの計画と成果公表の方針に沿うものであり、十分な成果を収めることができた。

また本研究期間中に次項に記す発表論文等の成果を収めることができた。これらの研究成果は、いずれもメルロ＝ポンティの哲学における文学や芸術の問題を扱ったものであり、また主題としてメルロ＝ポンティが取り上げられていない場合も、存在論と文学の言語の関係についての考究を含んでおり、本研究計画の成果と呼べるものである。

とりわけ、本研究の成果をフランス語、ドイツ語で発表できたことが、本研究の成果を国際的に発信するとともに、本研究の意義を国際的に問うことになったと自負している。

また、メルロ＝ポンティに関連しない研究においても、本研究での手法を転用することにより、他の哲学者の研究に拡張することができることを示すことができ、本研究の今後の方向の拡大を展望することができたと考えている。

とりわけ、シェリング、ブランショ、田辺元らについて行った研究は、決して本研究のテーマと関連しないわけではなく、今後、本研究を「哲学と文学」の相互作用の歴史研究へと展開して行く方向を見いだし得た点で、今回の研究をただメルロ＝ポンティ哲学の理解だけではなく、哲学と文学の関係をより深く、本質的に考察するために役立てることが可能であることを示したと言えよう。

このように、本研究期間中に公表された研究は、その内容、国際性、将来性の点において、十分な成果を収めたといえる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 8 件)

(1)加國尚志「メルロ＝ポンティ哲学における文学と両義性」『立命館文学』625号 p.90-103, 2012年12月(査読無し)

(2)加國尚志「神々の骰子 シェリングと自然の根源偶然」『シェリング年報 12』20号, p.42-50, 2012年7月(査読無し)

(3)加國尚志「沈黙と偶然 田辺元『マラルメ覚書』をめぐって」『思想』1053号 p.57-74, 2012年1月(査読無し)

(4)加國尚志「私は今ここで、あそこにいる メルロ＝ポンティの身体論と空間論」『臨床哲学の諸相 空間と時間の病理』p.100-127, 2011年1月(査読無し)

(5)Takashi Kakuni, Die Leib als Bedingung von Vorstellung, Orbis Phaenomenologicus 23, 2010. (査読無し)

(6)Takashi Kakuni, Le corps aux limites de la representation. Théorie du corps et de la peinture chez Merleau-Ponty, Chiasmi Internationale 12, p.203-216. (査読無し)

(7)加國尚志「モニタージュ、同時性 メルロ＝ポンティにおける不在のイメージ論に向けて」『フランス哲学・思想』15号 p.3-16, 2010年10月(査読無し)

(8)加國尚志「「あいだ」の共有 生命の現象学と臨床哲学 メルロ＝ポンティ、ヴァイツゼッカー、木村敏」『現代思想』2010年10月号 p.94-109, 2010年10月(査読無し)

[学会発表](計 3件)

(1)Takashi Kakuni, La chair du monde—une petite consideration sur la relation entre deux écrivains, Merleau-Ponty et Claude Simon, Colloque internationale de Archives Husserl, Paris, 2012年5月5日(国外 フランス、パリ)

(2)加國尚志「神々の骰子 シェリングと自然の根源偶然」第20回日本シェリング協会大会 山口大学 2011年7月3日(国内 山

口県)

(3)加國尚志「私はこの世ではとらえられない クレーをめぐるメルロ＝ポンティとハイデガー」ハイデガー・フォーラム第5回大会 早稲田大学 2010年9月19日(国内 東京都)

[図書](計 0件)

[産業財産権]
出願状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

6. 研究組織

(1) 研究代表者

加國 尚志 (KAKUNI TAKASHI)
立命館大学・文学部・教授
研究者番号：90351311

(2) 研究分担者

なし ()

研究者番号：

(3) 連携研究者

なし ()

研究者番号：